「高知の授業の未来を創る」推進プロジェクト
「主体的・対話的で深い学び」を実現するための実践研究事業
第4回　授業研究会

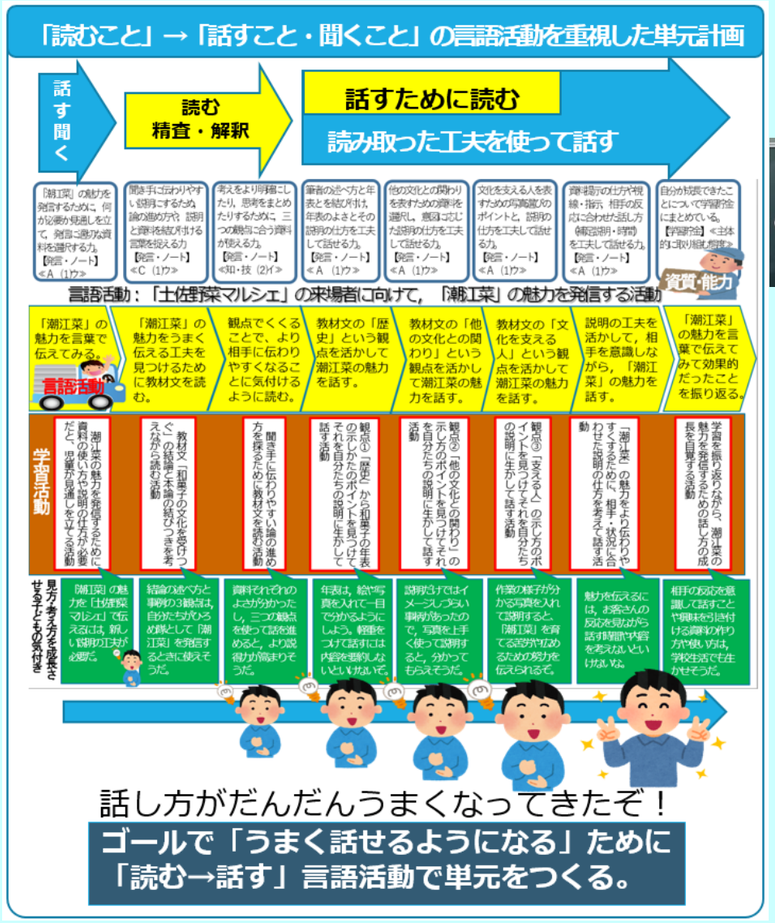
［発行］
令和元年 10 月
高知市教育委員会
学校教育課
学力向上推進室

学びに熱中する子供の姿がここにある！
「主体的・対話的で深い学び」を実現するための実践研究事業では，教材分析力・授業分析力の向上を目指し，潮江東小学校（指定校）を会場に教材研究会・授業研究会を実施しています。今回は，第４回【授業研究会】（９月 20 日実施）での学びの様子と単元構成を紹介します。

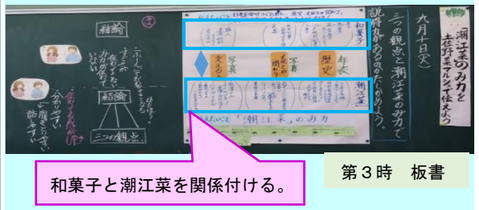
チェック
今後の予定と申込みについて
今後の日程及び申込みについては，HP をご参照ください。
他のレポートも多数掲載！

第５学年　単元名　「潮江菜」ひろめ隊　～「潮江菜」の魅力を発信しよう～　《話すこと・聞くこと》
教材名　「和の文化を受けつぐ　ー和菓子をさぐるー」（東京書籍５年）
授業者　清田　尚吾　教諭（高知市立潮江東小学校）

提案の主旨
「見方・考え方」を働かせて学びを深める国語科単元づくり（授業づくり）のあり方
【本単元で付けたい力】自分の考えを伝えるために，資料を活用したり，視線や指示の仕方などの表現の工夫をしたりして話す力
【設定した言語活動】「土佐野菜マルシェ」の来場者に向けて，「潮江菜」の魅力を発信する活動

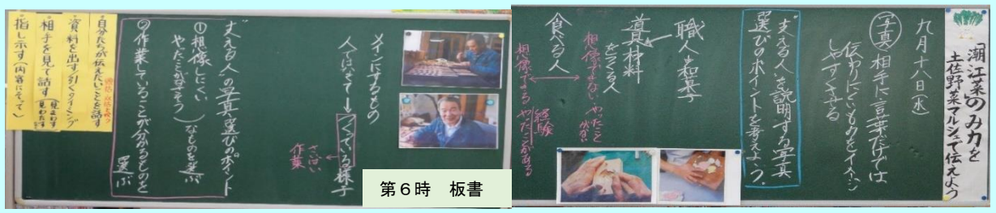


話すため（目的的）に読む
第１時から最終時まで，自分の考えを伝えるために有効な資料を作成するという目的のために説明文を読む単元構成にした。


和菓子と潮江菜を関係付ける。
第３時　板書

毎時間「読むこと」「話すこと」を設定
これまでは「読むこと」で学習しておいて，単元の終末に「話すこと」に取り組む単元構成が多かった。そのため，読んだことを使って急に話してみようと言われても子供は戸惑い，思考の流れがつながらないことがあった。
そこで，今回は毎時間，読み取った工夫を使って話す言語活動を，単元を通して設定した。

読み取った工夫を使ってとにかく話してみる
読み取った工夫を使って，すぐに「潮江菜」の魅力について話してみる。その様子を録画・再生し，改善点を探ることに取り組む。


第６時　板書

授業者の感想

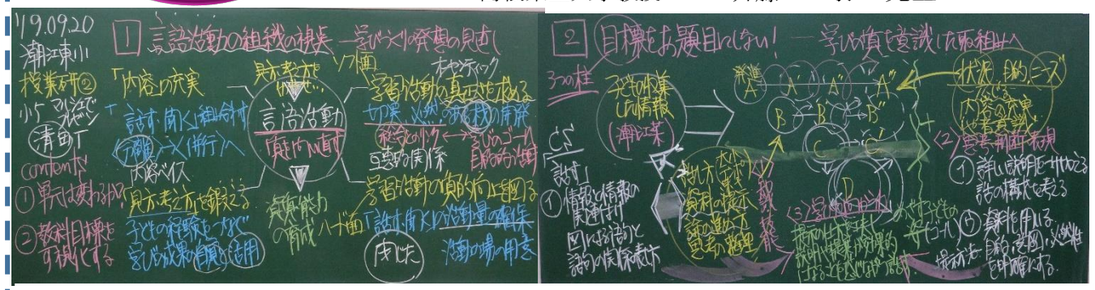
【５年１組担任　清田教諭】
今回の単元は，目的的に読むことを通して，筆者の論の進め方・資料の選び方のポイントを学び，それらのポイントを活かして総合的な学習に時間を進めていくようにした。表現の方法のよさを学ぶことに主眼があったので，内容に引っ張られて言語活動に向かいにくいということが少なく“（説明文は）参考資料の一つ”として活用するスタイルで進めるよさを感じた。また，子供にとって，単元のゴールに向かうために何が必要なのかが見やすかったようで「次はあれしよう！」という声もあった。本単元構成は，見通しをもって学ぶことができるよさもあったと感じた。さらに，だんだんとゴールに近付いている感じが，学びの成長を実感できる要因にもなっていたのではと感じる。
話し方についても，本時に向かうまでに子供なりの工夫を行う姿が見られた。本時は，状況や相手の反応に対応していく・合わせていくことで相手の興味や説得力を高めていくことが大切ということに気付かせることをねらいにした。実際に話してみることで，課題にぶつかったときにどうしたらよいかを考える姿が見られた。「資料や表現などをバージョンアップしなければ！」という声も上がっている。授業では，言葉にこだわって押さえるべきところはあったが，“やってみる”が大事だということを感じた。

【５年２組担任　坂元教諭】
学習指導要領に明記されていることを，単元計画の段階でしっかり落とし込んでいくことが重要だと改めて感じた。児童に付けたい力を，どう単元に組み込み，そして１時間に当てはめていくかは，指導者がしっかりもっておくべきことだと思う。
１時間の間に「もっと工夫を！」と子供たちなりに改善，変化を付けて挑む姿がよかった。教材を目的的に読むことで，児童の読む視点は定まったように感じた。単に説明文の書きぶりだけでなく，「相手に伝わるように」という視点は，自分事として捉えることができ，その後の発表の資料づくりに活かせた。ただ何となく写真を選んだ子が，授業が終わった後に「この写真では伝わらないから変えてください」と自ら言いに来ていたことからもそのことが分かる。

【参会者の感想】
・総合的な学習の時間と国語をリンクさせることで，子供の意欲が高まり，学習したことを使ってみたいと思えるのだと分かった。実践してみたい。目的がはっきりしていて，ずれていないから子供がより広く考え，実践できるのだと思った。児童が学習に対して「必要だ」と思える単元づくりが大事だと思った。
・１時間の中で児童が課題点に気付く，話し合いながら改善点を考える，実践してみるという一連の流れがあったことが，とてもよかった。
・研究会を通し，自分の授業を見直すよい機会となった。国語の教材を学ぶのではなく，教材から得たことを使って表現することを再確認した。また，自分の授業の表現活動では，練習をして，発表をして，感想を言い合って終わりということが多かったように思う。今後の表現活動では，子供の失敗感を大切にし，その失敗から学んだことを次につなげていくことのできる学習にしたいと思った。

言語活動の質を問う

講師による指導
講師　高知県教育委員会事務局学力向上総括専門官
島根県立大学教授　齊藤　一弥　先生



事後研究は「１時間の授業がどうだったか」ではなく「単元を通してどうだったか」について協議しなければならない。今回の場合，言語活動の質を四つの視点（下の①～④）で問い直す必要があった。
①内容の充実…学んだらそのことを使ってみて，足りなかったら補ってという併行型の単元構成になっていたか。
②「見方・考え方」を鍛える…学びの成果の自覚と活用を繰り返し，子供自身が成長を自覚できる言語活動になっているか。
③「学習活動」の真正さを求める…子供にとって切実・必然のある教材の開発ができているかどうか。潮江東小では総合とリンクさせて学びのゴールを明確に設定できていたので，目的的活動になっていた。
④「学習活動」の質的向上を図る…「話すこと・聞くこと」の活動量を確保する言語活動になっているかどうか。